市民環境大学OB会 ニュースレター

第５７号　２０２６年６月１８日　発行



黒川清流公園の花シリーズ２
金蘭 2023/4/19（別所さん提供）

市民環境大学OB会の運営規約改定される！

日野市民環境大学OB会では会の運営上支障のない推進のため、２０１９年４月に運営規約が制定されました。しかし昨年4月、新会長に田中良一氏が就任され、運営規約も一段充実した内容になるよう定例会議にて検討され、3月の定例会で確定しました。今回、田中良一会長に規約改定の経緯等ご投稿頂きました。また10条からなる規約内容についても以下に紹介します。

市民環境大学OB会運営規約改定について

OB会会長　田中良一

市民環境大学OB会は２００９年市民環境大学開講の４年後２０１２年に受講生有志によりOB会が設立されました。活動も定例会開催、放射線量測定、黒川清流公園周辺の湧水量測定、ニュースレターの発行等継続しております。

これらの活動継続の中、資金調達の必要性もあり「OB会運営規約」を２０１９年に制定いたしました。その後、役員の交代、個人情報保護法の制定を受けて２０２６年４月付で規約内容の改訂を行いました。

日野市民環境大学OB会運営規約

第１条（会の目的）
環境に対する意識の向上と会員相互の親睦を深めるための活動を行うことを目的にする。
第２条（名称）　この会の名称を以下の通りとする。　**日野市民環境大学OB会**
第３条（事務所所在地）　会長宅を事務所の所在地とする。
第４条（会員）日野市立カワセミハウスが主催する日野市民環境大学の終了者を参加の条件とする。
第５条（役員）この会に以下の役員と特別担当役員を置く
会長　１名　副会長　１名　会計　１名　特別担当役員　１名
第６条（役員の任期）任期は１年とし、年初の定例会で決める。
第７条（代表）
会長は会を代表し、円滑な運営に努める。副会長は会長を補佐し、会長が不在の時は会長の職務を遂行する。　会計は会の経費管理を行う。特別担当役員はその職務を全うする。
第８条（運営）
毎月１回　カワセミハウスで定例会（勉強会）を実施する。但し野外学習を含む。
活動誌「ニュースレター」発行
重要事項については出席者の過半数の同意をもって決定する。
第９条（会費）
会費は年初の定例会にてカンパを募り、原則これを財源に運営費用に充てるものとする。
第１０条（規約改定）
この規約は出席会員の過半数の同意をもって改正することが出来る。
附則　１　設立年月日　２０１２年４月１日
１　会の役員は次の会員とする
会長　田中良一　副会長　原田武司　会計　畦元智恵子
特別担当役員　環境計量士　細川秀二
１　顧問　日野市立カワセミハウス　小倉　紀雄（東京農工大学名誉教授）
１　この会則は　２０２６年４月１日から改定する。

ＯＢ会コラム①　　このところ、OB会コラムの投稿が多く、今号では３件紹介します。最初は常連の田中徹さんです。日野市の公園でのイチョウの枝落下による痛ましい事故が発生し、多くの樹木が伐採されています。それに関連して以下投稿頂きましたので紹介します。

黒川清流公園の樹木伐採、枝下ろしと林内樹木（人工林）の自然遷移

ＯＢ会　　田中　徹

黒川清流公園の樹林は2020～22年年に発生が確認されたナラ立ち枯れ病の被害・天災で多くのクヌギやコナラが伐採されました。2024年9月多摩平で起きたイチョウの枝落下による不幸な死亡事故の発生で、市内の公園等の樹木の一斉点検が行われ安全管理上から多くの樹木の伐採や枝下ろし・人災？が実施されました。二度にわたる伐採・枝下ろしで黒川清流公園の樹木は大きな被害と痛手を被りました。事故から1年以上過ぎた今、幾つかの問題を考えたいと思います。

１．過剰反応、過剰伐採・枝下ろしになっていないか・・黒川清流公園・樹木の痛ましい景観。

黒川清流公園は日野市一番の水と緑がある人気スポットとして訪れる人を癒やしてくれています。
公園の樹木からは四季折々に様々な恩恵とエネルギーを頂いています。
ナラ立ち枯れ病による伐採は、やむを得ない面もありますが、危険予知による今回の伐採・枝下ろしは安全管理上必要ですが効率優先の過剰反応過剰伐採・枝下ろしになっているように思います。
一般例ですが昨今、公園の遊具が使用禁止される事例もあるようです。事故の発生による行政の責任と訴訟を回避するためです。痛ましい樹木や景観を目にすると少しやり過ぎと思いますが如何ですか。
『喉元過ぎれば熱さを忘れる』の管理にならぬよう祈るばかりです。



伐採・枝下ろしされた樹木・段丘崖上部



伐採・枝下ろしされた樹木・段丘崖上部

２．伐採・枝下ろし後の二次林の自然遷移・・・どんな植物が出てくるか。・・・下刈りが必要。

火山噴火跡地や山の崩落地などにはコケ類⇒地衣類⇒イネ科植物⇒マメ科植物、低木などの先駆植物（パイオニア植物）・陽性植物が侵入繁殖していきます。二次林（人工林）は伐採や枝下ろしにより樹幹ギャップが生まれ地面に光りが届くようになると土壌のシードバンクが休眠を破り発芽してきます。段丘上部の散策路は植生の教科書のように先駆種樹木が芽生えています。アカメガシワ、ニセアカシア、カラスザンショウ、コナラなどの陽樹です。



左写真：カラスザンショウ、アカメガシワなどの幼木。

右写真：カラスザンショウ、ニセアカシア（奥）、コナラ（地表）などの幼木





ニセアカシアの幼木と鋭いトゲ



カラスザンショウ幼木トゲ

しかしニセアカシアやカラスザンショウには鋭い刺（とげ）があり、走ったり、飛んだり、撥ねたりする子供達が触れると傷を負ってしまいます。

樹上の枝だけでなく地表の危険な樹木も管理する必要があるのです。

備考）この文章は2025年12月29日（写真は12月11日）の現地状況に基づいて書いたものです。その後、行政が下刈りなど散策路の整備を実施した場合は現況が変わっていると思います。安全を考えると早く下刈りなどの整備を願うものです。　　2026/02/11記　　以上

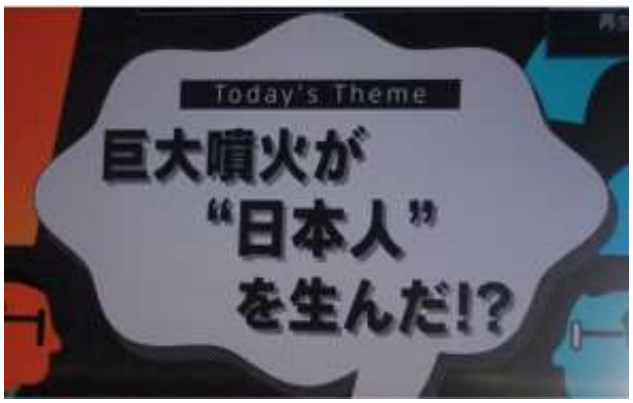
ＯＢ会コラム②　　ＯＢ会コラム②も常連の原田さんです。今回はTV番組から考える災害日本列島における原子力発電についてです。東日本大震災での原発事故以来、放射線量測定を中心になって継続されてきた原田さんのコラムは大変重いものがあります。以下紹介します。

日本列島に原発が向かない理由

ＯＢ会　　原田　武司

2011年の東日本大震災による福島原発事故以来、再生可能エネルギーへの転換の世界的な高まりも次第に衰えてしまっている。極めつけは環境問題を否定する米トランプ大統領、ＥＶ車で中国に太刀打ちできないことを悟や排気ガス規制の撤廃まで言い始めた。
お膝下の日本でも福島原発の後始末も見いだせないまま、原発再稼働が進められはたまた新設計画まで取りざたされている。
そんな中NHK「タモリと伸弥のびっくりハテナ《巨大噴火が日本人を生んだ!?》」という番組を観て日本に原発がいかに不向きであるかを確信した。

番組は神戸大学チームの九州薩摩硫黄島近くで7300年前に起きた「鬼界カルデラ」の海底探査から始まった。最新のテクノロジーを駆使して縄文時代の巨大な溶岩ドームの全容が明らかになった、その規模は高さの平均が450メートル・直径10キロメートル・体積32キロ立法メートル。これは過去1万年間で起きた地球史上最大の噴火（神戸大学　島伸和教授）でマグマ噴出量は180キロ立法メートル。富士山の宝永噴火（1707年）の0.7キロ立方メートル・浅間山の天明噴火（1783年）の0.6キロ立法メートルと比較しても250倍以上いかに巨大かわかる。火山灰の到達範囲は九州地方で48cm・近畿地方12cm・関東地方3cm・福島新潟1cmにも及んでいる。九州地方は噴火前160カ所見つかっている遺跡が噴火後は40未満と壊滅状態である。また立命館大学の中川毅教授はヒノキ花粉の増減調べると噴火300年後まで短い時間スケールで大きく変動する時代続く、そのことから広い範囲で気候変動が引き起こされたと推測している。





観測チームのリーダー・神戸大学　巽好幸名誉教授によると日本列島は地球上で最も地震と火山が集中している「変動帯」であり、国土面積は全世界の0.3%に満たないにも関わらず活火山の数では全世界の7%が日本に集中していて、Ｍ7.0以上の地震は世界の約20%が日本で発生している。また弥生時代にも鹿児島湾の「姶良カルデラ」の超巨大噴火も経験している危険列島が日本である。
「鬼界カルデラ」最新情報、先の神戸大学に海洋研究開発機構が加わる共同調査で縄文時代と同等の400キロ立法メートルのマグマだまりが再構築され噴火態勢にあることが判明、予知に全力で取り組む様子も映し出された。そして番組は度重なる大災害乗り越えて培われた日本人の協調性、この特性をこれからも保たなければならないと結んでいる。
このように日本列島の特異な地形の成り立ちを知れば知るほど災害を増幅しかねない原発が不向きであることは明らかだ。経済ファーストで目先の損得に押し流されることなく日本列島の未来を見つめることの大切さを教えてくれた。

2026/2/28　原田　武司

ＯＢ会コラム③

OB会コラム③は川村桂子さんです。今回本コラム投稿の経緯を別所さんから以下「」書きコメント頂きました。合せて以下紹介します。「市民環境大学講座水利用で日野市の水車や3連水車が紹介された。翌週、５連水車が川村さん(水車の近くに母校あり)から紹介された。水車の水しぶきの勢いに感動し、原稿を依頼すると共に大変興味深い富山の水事情を知リ得たのでシリーズで紹介したい。」なお、富山の水を知ろうは次回紹介の予定です。

富山の水を知ろう　／ 五連揚水水車

OB会　　川村　桂子

砺波地方では、古くから清流「庄川」の豊かな農業用水を利用した「らせん水車」などの様々な種類の水車がいたるところに見られ、「脱穀」「精米」や「縄ない」などの農作業の動力源に使われていました。
今ではこのような水車のある農村風景は見られなくなりましたが、砺波チューリップ公園内の「水車苑」の横を流れる新又口用水の改修にあわせて平成5年に五連揚水水車が富山県により日本で初めてつくられました。
完成後、砺波市が施設を譲り受け、〝うるおい〟と〝やすらぎ〟のある、かつての農村風景として多くの皆さんに親しまれています。

この水車は、水の流れを利用して水を汲み上げるもので、昔は水田のかんがい用に使われていました。ここでは、水車苑の「らせん水車」「上掛け水車」や「下掛け水車」などの水車を回すために、五連揚水水車の両側に220個のヒシャクをつけて１秒間に22.3リットルの水を汲み上げています。この水を水田かんがいに利用した場合には約30ヘクタールの農地を潤すことができます。この五連揚水水車は、平成5年に造られたときから、揚水水車としての規模は、日本一を誇っています。この水車をステンレスと人工木を使用して全面的に造りかえて、耐久性を向上し長寿命化を図りました。
砺波チューリップ公園「水車苑」案内図より
26/2/12





写真右上：日本最大級の五輪揚水水車
写真右下：となみチューリップフェア時の五輪水車

OB会メンバー　活動イベントニュース

・５月開校予定の市民環境大学生募集のポスター掲示とチラシを市内各図書館へ配布（原田武司さん）
（市民環境大学は都合により６月４日再開です。）

OB会　例会情報　話題提供と話し合い情報

・３月例会：　「日本列島に原発が向かない理由」OB会コラム参照　原田武司さん紹介
「黒川清流公園の小道情報」　三村聡さん紹介
「桜にまつわる３つの話」　末包通信さん紹介
①お花見の由来　②桜の老齢化　③休眠打破
・４月例会：　特になし
・５月例会：　「データセンターの宇宙進出について考える３つの話」　末包通信さん紹介
①宇宙にデータセンター　②スペースX　6月にも株式上場
③“電力無限”の衛星データセンター

発行人：市民環境大学OB会　田中良一　　編集担当：OB会　尾添俊二